将　礼

兵卒たちにとって将軍とは、理性の面で卓越した上官であるのだから、人としての欲望から離れて礼を厚くし、色欲を禁じなければならない。将軍が礼を欠くということでは、色欲におぼれることほど甚だしいことは無い。将軍が女色を好んで節制を失っているような時は、軍を構成する人びとの心は決して堅固なものにならず、それだけではなく陰気な雰囲気が芽生えて、戦になれば敗れて滅亡することは疑いないのである。城が傾き、国が傾くような話を耳にしたならば、誠実な心でこれを他山の石として畏れ、身を慎まねばならない。良い将軍と暗愚の将軍の違いでは、その「智」の甚だしい懸隔を補うために学んで知ることは、さほど難しいことではない。ただ将軍として立派に「勤める事」が難しいのであり、この違いこそが天と地ほどに開くのである。このことを十分に心得ておれば、どうして祖先の訓えに背き、自分の汚名をも顧みずに、国家に尽くす替わりに一時の娯楽にうつつを抜かすことが許されようか。

雨が降っても天幕を張らず、暑くても扇子で煽（あお）らず、疲労しても自分一人だけが休むことはせず、飢えても自分だけが食べるようなことはしない。善悪の基準を多くの人々と同じくし、生きるも死ぬもともにして、たとえば越王の勾践が箪醪（たんろう　※）のことを思い、楚の荘王が戦地での慰問や娯楽を与える心配りを決して忘れなかったようなときには、士卒も飢えや疲労を厭わなかったのである。皆が将軍のために死のうと思えば全軍に二心は無い。軍旅（指揮下部隊）の士卒全員の命を預かる司令官として、あらゆる人々に礼をもって接する事ができなければ、その罪は重い。このことをいい加減にしたり、忘れたりしはならない。ただ武家たちが恩を感じておのれの命を軽んじ、受けた礼に応えようとして各々の忠誠心が完全に発揮し尽くされるときのみ、将軍が士卒を率いていると言えるのである。もしも一言によって人の心が踏みにじられ、一つの行いで人々の心が離れていくということを知らなければ将軍たる資格は無い。飯に唾を吐かれ、汁に髪を入れられることにさえなるのを忘れるな。大将の居所をこそ「陣」と呼ぶのであるから、戦の大将たる将軍は、常に陣頭

に在って指揮下部隊の事を忘れず、四六時中、寝ることや食べることに関して専ら部下達の心情を慮って、そのことを決して忘れない。そのような時にこそ、将軍の礼がそこに存在するのだと知らねばならない。

このように、君主が君主として立派である時に、立派でない家臣などはありえないのだから、一国一軍を守る身に限らず、全て人の上に立つ者の心がけは、我が一人の行いを正しくして、あえて部下の挙動を憎んではならない。真っ直ぐな形に曲形は無く、曲がった形に直形は無し、と言われる。君主は体であり、配下の人々はその影のごとくあらねばならない。そうであればこそ、水は四角や円形の器に随い、人の善悪は一人の心に左右されるのである。雲は竜にしたがい、風は虎に向かって起ると謂われるのもこのことである。仁徳の無い者の国には、(幸福をもたらす)麒麟や鳳凰が飛翔せず、礼を欠く国には、賢士は住まないとも言われる。国に賢士が進んで来る時には、我が行いを喜び、国に悪人が多い時には、我が行いを反省しなければならない。又、侍(さむらい)に至っては、不礼の礼(礼の形をとらない礼)も時によっては心得なければならない。口伝を受けてこれを知るべし。

※　箪醪(たんろう)＝ひょうたんに入った酒。

古代シナの兵書「三略」に、次のようなことが記されている。

将帥というものは、必ず士卒と慈愛の心を同じくし、安危をともにすれば、戦(いくさ)では全勝する。その昔、優れた将軍が兵を用いていると、箪醪(たんろう)を寄贈する者があった。将軍はこれを河に投げすて、士卒とその河を流れる水を共に飲んだ。ひょうたん一本の酒では、皆とともに一河の水を味わうようには出来ないからである。将軍の慈愛心を我が身に感じた全軍の士卒は、この将軍のために死を致さんと思った。